

研究ノート

# 武士道思想における死生観に関する比較考察

——『日新館童子訓』を中心に——

Comparative consideration about the view of life and death in Bushido thought:  
Focusing on “nisshinkandoujikun”

高瀬 武志

桐蔭横浜大学法学部

(2021年3月12日 受理)

## I. はじめに

武士道思想には、大きく分けて「武士道論」と「士道論」という二つの思潮がある。それぞれの思潮における特徴と代表的な史料をあげると以下ようになる。

まず「武士道論」とは、戦国乱世を生きた武士・武将を理想とし「死」を積極的に受け入れ、或は身近なものとし「死への覚悟」を大前提とする思潮である<sup>1)</sup>。「武士道論」を代表する史料として『甲陽軍鑑』『葉隠聞書』が挙げられる。

次に「士道論」とは、天下泰平の世となり、武士は戦闘を必要としなくなったかわりに、世を治める「三民の上になつ」武士像を戦国以前の武士の間にみられた武士特有の思想(弓矢の道等)に儒教の思想を融合させることによって為政者としての「職分の自覚」を大前提とした思潮である<sup>2)</sup>。「士道論」を代表する史料として『山鹿語類』『武道初心集』<sup>3)</sup>が挙げられる。また、時代は少し下るが、士道論に属する史料で武士の思想形成に大きな影響を与えたものとして会津藩における藩校・日新館においてテキスト的書物であった

『日新館童子訓』が挙げられる。

『日新館童子訓』は、藩校・日新館における藩士の子弟を教育するために、文化元年(1804)に上下二巻の木版本として刊行された修身の教科書である。この書は、会津藩五代目藩主・松平容頌が指示し、数名の儒学・神道学者の参画と幕府の儒者・屋代弘賢の校閲を経た後、老中・松平定信による序を付加した書物である。いわば、幕府公認の武士道書であり、会津藩士における思想形成に多大な影響を与えたことは先述したとおりである。

また、会津藩といえば、幕末維新における戊辰戦争での薩長以下の西軍との激闘の末、自決した白虎隊の最期が有名である。さらに立場に違いはあれども、この戦闘における会津武士の武勇と潔さは後世の人々の認める所であり、現代においても変わらない評価を得ている。このような会津武士の士風・思想を養成したものの原点に『日新館童子訓』が注目される。

また、士道論の思潮の中で、特筆すべき史料として挙げた各史料の著者と会津藩ならびに松平家は、間接的直接的に拘らず、深い縁をもった間柄である。そこで、『山鹿語類』『武道初心集』が有する思潮・性格と『日新

館童子訓』の思潮・性格とを比較し考察することは士道論における思想的変遷と各書物における時代的特殊性を明らかにするうえで意義深いものであると考えられる。

## II. 目的・方法

武士道思想における士道論に関する先行研究で特筆すべきものとして相良亨『武士の思想』古川哲史『武士道の思想とその周辺』『武道初心集』が挙げられる。

両氏における先行研究では武士道を通史的に捉えての研究がなされている。また、士道論の祖とされる山鹿素行に関する先行研究では田原嗣郎・守本順一郎校注『山鹿素行』が挙げられる。さらに、藩校における思想と教育に関する先行研究として沖田行司『藩校・私塾の思想と教育』が挙げられる。また、会津藩における藩校「日新館」についての先行研究では松平容頌著・土田直鎮校閲『日新館童子訓』が挙げられる。

先述したとおり、山鹿素行・大道寺友山は師弟関係にあり、大道寺友山は会津藩松平家の客分として招かれて生活をしていたという経歴を有する。またこの三者は武士道思想における士道論を代表する書物の著者たちである。この三者の思想を比較しその異同を指摘している研究は管見するかぎり、見当たらない。しかし、この三者が生きた時代はもとより、後世の武士にまで少なからずの影響を与えていることは確かであり、この三者の教示した武士としてのあるべき姿は武士の死生観にも影響していると考えられる。よって、武士の思想の中でも死生観に注目して研究をすすめる。

本研究では、特に『山鹿語類』松代版『武道初心集』『日新館童子訓』に着目し、これら各史料にみられる死に関する記述を抽出する。そして、抽出した各史料における死生観が読み取れる記述を取り上げ、各々の死生観の特徴を明確にすると同時に、三者の比較か

ら同じ士道論の思潮における中での異同と変遷を明らかにすることによって、武士道思想の二大思想である武士道論と士道論のうちの「士道論」の思想の中における詳細や体系を明らかにすることができる。そして、士道論という武士の思想が武士社会にどのような影響を及ぼしたかということが新知見として明らかにすることができる。本論では、士道論における時代的特殊性に着目し『日新館童子訓』を中心としつつ『山鹿語類』『武道初心集』を研究対象として比較考察を行う。

## III. 『山鹿語類』にみられる死生観の特徴

『山鹿語類』の著者である山鹿素行（以下、素行）は、1622年（元和八年）会津若松に生れ、1685年（貞享二年）江戸で没した徳川前期の人物である。素行の著作は数多くあり、自伝的著作として『配所残筆』が挙げられ、素行の人生における詳細な事柄は『配所残筆』から窺い知ることができる。素行は晩年、武士道論者として、或は国体論者、日本主義者として脚光を浴びた人物である。しかし、素行の提唱する「聖学」とは儒教の正統意識の下に成り立っており、泰平の世における武士の存在理由を儒教によって理論的に構築しようとした士道論における魁の人物でもある。これは田原氏も同様に指摘している<sup>4)</sup>。

『山鹿語類』は、士道論を代表する書物であり、この書は従来日本の武士に脈々と受け継がれてきた「武士の道」という思想に、中国から伝わった「儒教」の思想が結びついたところに最大の特徴がみられることは先にも述べた。このように武士道（論）に対して、士道（論）という思想が形成されるに至った要因に、武士の支配者・為政者としての自覚が挙げられる。これは相良氏の『武士の思想』に「士道が武士の支配者為政者としての自覚の中に形成されたものである」<sup>5)</sup>と記していることから理解できる。

また、近世の武士の大半においてこの士道

の思想が受け入れられ、公的には「武士の道」という思想は、士道（論）が主導するに至った。これは相良氏の『武士の思想』に「この士道が公には近世の武士の思想を主導することになった」<sup>6)</sup>と記されていることから理解できる。

次に『山鹿語類』が成立した武士の時代について述べる。当時はすでに徳川幕府の支配により、戦乱は絶え、天下泰平の世であった。また徳川幕府の政策により、士農工商という四階級に分けられ、各々の身分が確立されていた。中でも特に武士は支配者・為政者という立場であることから他の階級の規範となることを強く求められた時代である。

ここで、士農工商の各身分における職分について触れておきたい。士とは、従軍を生業とする職分であった。農という身分は農民を示しており、農民は田畑を耕し、作物を生産するのが職分である。工という身分は職人として物を造るのが職分である。商という身分は交易に従事し、物事の流通を司るのが職分である。

このように各々の身分によって職分が明確に分類され、制度化されていた。また、一般的にそれらの職分の重要度の順で士農工商と表現するようになったことは周知の事実である。以上のように士農工商の身分の中で農工商には明確な職分がある。

しかし、士の職分は、農工商の身分の職分ほど明確な必要性・重要性は漠然としたものであった。それは、戦乱が治まり、太平の世となった江戸期において、戦闘を生業とする武士は必要ではなくなったからである。徐々に戦闘の機会を失った武士は心身共に軟弱化していく。そこで、武士の担うべき職分とは何か、武士の存在意義とは何かが問われる時代へと移行していったと考えられる。そういった時代の中で、素行は、先述したように武士の担うこれからの職分と武士の存在意義を、従来の戦闘を生業とする武士の荒々しい思想と「儒教」という聖人・為政者としての思想とを結びつけて士道とし、武士は人倫の道を

天下に実現することが職分であり、この新しい職分を「知る」ことを武士が自覚すべき根本として強調した。これは相良氏の『武士の思想』に以下のように記されていることから理解できる。

「武士が自覚すべき根本としてまず強調したものは「己の職分を知る」ことであった。農は耕し、工は造り、商は交易に従事しそれぞれ額に汗して生活している。武士は「不耕不造不沽の士」であり、もし何らつとめることなく衣食するとすれば、それは「遊民」であり「賊民」である。そこで素行は、しからば武士の職分は何かと、武士自らに問うべきであるという。人の話を聞き、ものの本を読むのではなく、切実に自ら問い、心の底から自ら武士の職分を自覚すべきであるというのである。素行によれば、かくて自覚さるべき武士の職分は、人倫の道を天下に実現すべき職分であった」<sup>7)</sup>

また、『山鹿語類』に以下のように記されていることから理解できる。

「凡そ士の職と云は、其身を顧み、主人を得て奉公の忠を盡し、朋輩に交て信を厚くし、身の獨りを慎で義を専とするにあり、而して己れが身に父子兄弟夫婦の不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>交接あり、是又天下の萬民各なくんば不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>の人倫也といへども、農工商は其職業に暇あらざるを以て、常住相従て其道を不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>盡、士は農工商の業をさし置て此道を専つとめ、三民の間苟くも人倫をみだらん輩をば速に罰して、以て天下に天倫の正しきを待つ、是士に文武之徳知不<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>ばあるべからず」<sup>8)</sup>

以上のことが『山鹿語類』が成立するに至った時代背景と経緯として理解できる。

『山鹿語類』は、素行の思想を大系的にまとめたものであり、その分量は非常に多い。

また「死」に関する記述も多く散見されるが、本研究では、なかでも特に素行の提唱した士道論の死生観を窺い知ることのできる「死」に関する記述を抽出し考察を行う。

『山鹿語類』にみられる「死」に関する記述で主要なものを挙げると以下の表1のようになる。

表1 『山鹿語類』にみられる「死」に関する主な記述

「死」に関する記述 (下線部筆者)	左記の記述から読み取れる事柄
<p>①山鹿語類 臣道一 臣職 p.34 死易生難 師曰、死<sub>二</sub>天下之事<sub>一</sub>易、成<sub>二</sub>天下之事<sub>一</sub>難と云へることあり、生死は至て大也といへども、すでに身を委ねて臣たるの上は、事に臨んで死せんことは至て易くして、我職を守て天下の大事をとげんことは甚成難き處也、古を考るに、國亡び家やぶれて、堂上堂下に充滿するの臣皆一同に死をとぐるは多くして、亡びやぶれざらんあらかじめの謀は成がたく、亡び破れて又再興すべきの手立をなすの輩は猶なりがたし、主君逝去のとき殉死して終るは易くして世以て多く、常に諫め戒しめて、君の政を助け民を救ふの事をなすは難きものなり、こゝを以て考ふるに、臣の職、只死を一途に究むるを以て忠勤と思ふべからざる也</p>	<p>・下線部からも理解できるように、武士たる者は、事に臨んだとき、ただ死ねばよいという考えは、常日頃から死を覚悟して生きている武士にとっては簡単なことであり、そのような死を遂げて満足するのではなく、主君のお役に立つため、天下国家のために生きることのほうが難しく、これが武士本来の忠勤であるという考え方から、何の為に生き、死ぬのかという問題の根底に天下国家の為という死生観がみとれる。</p>
<p>②山鹿語類 臣道二 仕法 p.53 死は太山の如く重しといへども、究理せずして死せん事は、その死節に當るべからず、節をしらんとならば、</p>	<p>・死は軽いことではなく、非常に重いことだと位置づけたうえで、何のために死ぬかをよく考えなくて</p>
<p>よく之を練るにあるのみ也</p>	<p>はいけないことから、武士道論にはない、死への意味付けがみとれる</p>
<p>③山鹿語類 臣道三 臣談 p.102 武士の家に生れては、太刀を取て死する道本意也、 常々武士道の吟味をせざれば、いさぎよき死は仕にくきもの也、能々心を武にきざむこと肝要也と云へることを末に記せり</p>	<p>・儒教の教示を基幹として、体裁を整えてはいるが、思想的根底には太刀を持って斬り死にすることが本意という戦国以前の荒々しい武士の思想が死生観としてみられる</p>
<p>④山鹿語類 臣道三 臣談 p.119 義に本づいて國のために忠あらんには、早く死し遅く死せしと云の評あるべからざる也、是義に順て死生をまかすればなり</p>	<p>・死生の問題は義に基づいて選択すればよいという考え方から、義を重要視した死生観がみとれる</p>
<p>⑤山鹿語類 臣道三 臣談 p.141 我身の死んは只天の命也と存じて不<sub>レ</sub>言と答へぬ</p>	<p>・天命に自分の運命を預けるという儒教的な死生観がみとれる</p>
<p>⑥山鹿語類 父子道三 父子談 p.229 古より今に至るまで、武士の家に生るゝ人、 名を惜で命を不<sub>レ</sub>惜</p>	<p>・戦国以前からの武家の考え方がみとれる。命よりも名を重んじる死生観がみとれる</p>
<p>⑦山鹿語類 士道 明心術 p.360 生死の場此一刹那にありと云ふとき、君のため父のため其外重きものゝために害あらんに於ては、速に死して不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>顧</p>	<p>・盲目的に死に走るのではなく、何のために死ぬか、またその死は他に害とならないかと考えるところに、現実的な儒教の影響がみとれる</p>
<p>⑧山鹿語類 士談一 p.443 太刀をとれば人を切んと思ふ、然る上は、萬事は一心のをき所より生ずるもの也、武藝の外、乱舞稽古之輩、可<sub>二</sub>切腹<sub>一</sub>也、武士の家に生</p>	<p>・儒教の教示を基幹として、体裁を整えてはいるが、思想的根底には太刀を持って斬り死にすることが本意という戦国以前の</p>

<p>れては、太刀を取て死する道本意也、常々武士の道吟味せざれば、いさぎよき死は仕にくきもの也</p>	<p>荒々しい武士の思想が死生観としてみられる</p>
<p>⑨山鹿語類 士談一 p.484 師曰、楠正成日、<u>大人は死を耻とせず生を耻とす、二心ありなんこと、是士の大なる耻也といへりとぞ、二心あらざるは義を不<sub>レ</sub>知しては勤めがたし、士道に志あらずんば、身を利する事を専として其本必ずたがふべし、故に道に志のありなん事を要とする也</u></p>	<p>・死は恥ではなく、むしろ二心をもって生きることのほうが恥であるという戦国以前の武士の気風がよみとれる</p>
<p>⑩山鹿語類 士談五 p.100 <u>兵の剛と云は最後の死を云へり</u></p>	<p>・死に際に武士の生き方の価値があるという考え方がみとれる</p>
<p>⑪山鹿語類 士談五 p.109 <u>をいさらばいて壘の上に死なんこと口惜次第也</u></p>	<p>・『葉隠』にも似た、戦国以前の武士の気風がよみとれる</p>
<p>⑫山鹿語類 士談七 p.240 <u>我身たとひ生ながら敵人の手に渡るとも、命は卒爾に棄べからざると存ずる也、己が一時の恕に身を棄、耻を思ふて早く死し、死をいさぎよくして一時の思ひを快せんことは、忠臣の道に非也と語りぬと</u></p>	<p>・安易に死へ走ってはいけないという考え方から、忠臣の道において死は重いことであり、安易に死ぬことは不忠であるという死生観がみとれる</p>

以上の表1の記述をもとに考察すると、素行は泰平の世における武士は為政者として威儀を正す必要性と徳川將軍家を中心とした武家が世を治めることの正統性を「儒教」の表現をもって理論的に述べているが、武士としての矜持や覚悟といった武士の思想の根底を支える部分では、戦国武士の気風が抜けきっておらず、老いて壘の上で死ぬことを嫌う記

述(表1、⑪)からは『葉隠』とも相通じる武士の死の覚悟が読み取れる。これは、素行が小幡景憲(甲州流兵学)や北条氏長(北条流兵学)から兵学を学び、戦乱を経験した武士たちの思想的影響が色濃く窺える。しかし、ただ盲目的に死に積極的になる或は賛美するという立場はとらず、その死が武士の命を懸けるに値するだけの意味があるのかを重要視しており、特に義や天命を重んじていることが理解できる。(表1、②④⑦)

以上のことから、『山鹿語類』にみられる素行の提唱した士道論における死生観として、武士にとっての死生とは、義或は天命といった儒教の教示を取り入れた形で理論的に捉えてはいるが、その根底にある武士としての死生に関する覚悟という側面では、戦乱を生き抜いた荒々しい武士の気風が受け継がれているといえる。この二面性が『山鹿語類』にみられる士道論の思潮的特徴であり、戦乱の世を経験している武士と戦乱の世を経験していない武士という同じ武士でも極端に立場の違う者同士が混同して生きた時代における時代的特殊性であると考えられる。

#### IV. 『武道初心集』(松代版)にみられる死生観の特徴

まず、著者である大道寺友山(1639～1730)の略歴と『武道初心集』の概略について言及する。

『武道初心集』は、1725年(享保10年頃)に執筆された武士教育のバイブル的書物であり、大道寺友山(以下、友山)は小幡景憲(甲州流兵学)、北条氏長(北条流兵学)の弟子であった。また、儒学者でもある山鹿素行の弟子であったことから儒教の影響も受けていたであろうと考えられる<sup>9)</sup>。そして友山は会津藩松平家の客分として活躍した後、晩年は越前藩に仕える。著作生活というのはほぼ晩年に行われたといわれている<sup>10)</sup>。

『武道初心集』は先述したとおり、大別し

て二系統に分かれ、五十六條からなる原本と四十四條からなる松代版がある。この両書における比較は古川氏が先行研究として詳しく指摘されており、演者も本学会 41 回大会の時に『武道初心集』の原本と松代版における比較を行いその一考察を発表したが、一般的に原本のほうは世に流布しておらず、松代版のほうは世に流布していたようである<sup>11)</sup>。相良氏も指摘しているが、松代版のほうはその体裁や内容、表現からも儒教的色彩が濃く、山鹿素行の思想を受け継ぐ士道論の代表的書物という位置づけをするのが妥当であると考えられる<sup>12)</sup>。

本研究では、原本『武道初心集』の考察は省き、一般的に士道論に属するとされる松代版『武道初心集』の考察をおこなうこととし、なかでも特に松代版『武道初心集』で述べられている死生観を窺い知ることのできる「死」に関する記述を抽出し考察を行う。

松代版『武道初心集』にみられる「死」に関する記述で主要なものを挙げると以下の表 2 のようになる。

表 2 松代版『武道初心集』にみられる「死」に関する主な記述

「死」に関する記述 (下線部筆者)	左記の記述から読み取れる事柄
① 武道初心集 上巻 総論 武士たらむものは、正月元日の朝。雑煮の餅を祝ふとて。箸を取初るより。其年の大晦日の夕べに至るまで。日々夜々死を常に心に <u>あつるを以て。本意の第一と仕り候</u>	・『武道初心集』を代表する考え方であり、常に死を心に留め、死を覚悟しながら生き、奉公をするという考え方がみとれる。
② 武道初心集 上巻 総論 死をさへ常に心に <u>あて候へば。忠孝の二つの道にも相叶ひ。萬の悪事災難をも遁れ。其身無病息災にして。壽命長久に。剩へ其人柄ま</u>	・死を常に心に留めておけば、忠孝どちらもやり遂げられるという考え方。死を重要視する死生観がみとれる。

でもよろしく罷成。	
③ 武道初心集 上巻 総論 皆常に死を心に <u>あてぬ油断より起る禍ひに候。</u>	・死を軽視するとそこから油断が生じるという考え方で、死を重視した死生観がみとれる
④ 武道初心集 上巻 総論 死を常に心に <u>當る時は物をいふも。人の物云返答を致すも。武士の身にては。一言の甲乙を大事と心得るを以て。譯もなき口論などを不<sub>レ</sub>仕。勿論むさと致したる場所へは。人が誘ひても行ざるゆゑ。不慮の首尾に出合ふべき様も是なく候。</u>	・死を心に留めることによって、武士たる者らしい振る舞いができるという点から、死を覚悟することによって生き方が決まるといふ死生観がみとれる
⑤ 武道初心集 上巻 総論 貴きも賤しきも。人は死を忘るゝゆゑに。常に <u>過食大酒淫欲等の不養生を致し。脾胃の煩を仕出し。思ひの外なる若死をも致し。たとひ存命にても。何の用に立</u> ざる病者とはなり果候。	・身分に関係なく、死を忘れ、油断すると武士としての生き方にも問題が生じ、役にたたぬ生き方をしてしまうという戒めから死の覚悟を重視する死生観がみとれる
⑥ 武道初心集 上巻 総論 死を常に心に <u>あつる時。其身の年も若く。無病息災なりといへども。兼て補養の心得を致し。飲食を節に仕り。色の道をも遠ざけ。たしなみ慎しみ候故に。其身も壯健に候。</u>	・死を心に留めることによって、武士たる者らしい振る舞いができるといふ点から、死を覚悟することによって生き方が決まるといふ死生観がみとれる
⑦ 武道初心集 上巻 総論 死を常に心に <u>あつる時は。貪欲の心もおのづから薄くなり。ほしきをしきのむさき意地あひも。左のみさし出ざる道理に候。</u>	・死を心に留めることによって、武士たる者らしい振る舞いができるといふ点から、死を覚悟することによって生き方が決まるといふ死生観がみとれる

<p>⑧ 武道初心集 上巻 総論 但し死をいかに心に當ればとて。吉田の兼好がつれゝ草に書置たる。心戒と申比丘がごとく。二六時中死期を待心にて。いつもたゞうづくまりてのみ罷在候は。出家沙門の修行にはいかんも候へ。武道修行の本意には相叶ひ不<sub>レ</sub>申候。</p>	<p>・死の覚悟は必要であるが、ずっと死ぬことばかりを考えることは出家者の修行であり、武士のとるべき生き方ではないという死生観がみてとれる</p>	<p>然れば身ばかりを売切の奉公人共可<sub>レ</sub>申かにて候。武士の義はそれとは違ひ。一命を奉る奉公人に候。</p>	<p>かけて義に殉じなければならぬという教示から義を重んじる死生観と武士像がみてとれる</p>
<p>⑨ 武道初心集 上巻 総論 心静なる時は。死の一字を思ひ出し。懈怠なく心にあてよと申事にて候。</p>	<p>・死を心に留めることによって、武士たる者らしい振る舞いができるという点から、死を覚悟することによって生き方が決まるといふ死生観がみてとれる</p>	<p>⑬ 武道初心集 上巻 臣職 我が身も命も我が物に非ずいつ何時主君の御用有べきも難<sub>レ</sub>計からは。彌身命を大切にかけ。大食大酒淫欲等の不養生を慎しみ。豊の上の病死をさへも本意と思はず。ましてや喧嘩口論など仕出して友傍輩を打果し。我が身命を失ふ類ひの不忠不義は。深く慎しむべき事に候。</p>	<p>・自分の命は主君の役に立つためのものであり、病や喧嘩等で失うことは不忠であり、忠義のためには命も惜しまないという死生観がみてとれる</p>
<p>⑩ 武道初心集 上巻 不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>勝負 勝負の氣を忘れざる時は。おのづから死を心にあつるの實にも相叶ひ候。</p>	<p>・死を覚悟できている者はおのづと勝負においても遅れを取らないという点から死への覚悟を重視した死生観がみてとれる</p>		
<p>⑪ 武道初心集 上巻 臨終 死を常に心に當ることを仕らず。人の死を聞ては忌々敷と存じ。おのれはいつまでも此世に在る筈の様に覚え。欲深く。生を貪る心より起る死ぞこなひに候。斯のごとき卑怯の意地にて。戦場に臨み。忠義の一圖を以て。晴なる討死などの。罷成べき義にては無<sub>レ</sub>候。爰を以て武士をたしなむものは。豊の上に於て病死を遂るを。一生一度の大事とは申すにて候。</p>	<p>・死を心に留めることによって、武士たる者らしい振る舞いができるという点から、死を覚悟することによって生き方が決まるといふ死生観がみてとれる</p>		
<p>⑫ 武道初心集 上巻 臣職</p>	<p>・義を重んじ、武士たる者は一命を</p>		

以上の表2の記述をもとに考察すると、松代版『武道初心集』にみられる死生観の特徴として「死を常に心に當る」ことによって、いざという時における死への覚悟や普段の生活態度にも油断なく、武士としてのあるべき生活或は奉公ができると指摘している点が挙げられる。松代版『武道初心集』において武士の死生観は、主君への忠義を示す一大事において命を懸け、平時での生活では死を心に當ることによって緊張感を持たせ、また怠惰への抑制をはかろうとしていると考えられる。また、為政者としての武士のステータスが確立された中で、武士本来の職分は主君への忠義を命懸けで示し、奉公をすることは時代や置かれる立場が変わろうとも何ら変化しないということ「常に死を心に當る」という言葉を執拗に使用することによって示しているように思われる。

一方で、徳川政権が盤石化し、戦乱を経験した武士が少なくなる中、泰平の世で育ち戦闘とは縁遠い武士が大半を占めるようになった江戸時代という、世界史的にみても類をみない平和な時代背景が武士の荒々しさを希薄

にしたと考えられる。

このような武士を取り巻く時代背景の中で、儒教の理論的教示を示しつつも武士としてどうあるべきかという教示を内面に含んだ形で生活態度全般に至るまで詳細に噛み砕いて論じている点に松代版『武道初心集』における最大の特徴があるように思われる。また、特徴が時代的特殊性としてみてとれる。

## V. 『日新館童子訓』にみられる死生観の特徴

『日新館童子訓』は、旧会津藩の藩校である日新館において藩士の子弟に対する修身の教科書である。会津藩主の始祖である保科正之が城下の岡田如黙の私塾を藩の学問所として稽古堂と称したのが日新館の始まりとされている。

日新館を設置した五代藩主松平容頌が、幼少藩士の教育のために著したのが『日新館童子訓』であり、その内容は朱子学一点ばりのものであった。また、典拠として掲げている經典は、朱子学に基づくもので、朱熹の著作である『小学』からの引用が多くみられる。『小学』は朱熹が幼少年における日常の儒教的作法の指針として著したものであり、童子訓もこの影響が多分にみられる。父母・主君・長上に仕える心がけや作法を懇切丁寧に説いた修身のバイブル的書物であり、さまざまな心得を五十余項にわたって述べ、次にその根拠となる儒教の經典の一節を挙げ、さらに日本における古今にわたる例をいくつか挙げて説いている。

成立に至っては、安部井鱗ら四名の儒学・神道学者の参画を得て成稿され、幕府の儒者である屋代弘賢の校閲を経て、さらに幕府の老中である松平定信の序を請い上下二巻の木版本として刊行されている。

また、『日新館童子訓』の特徴として教示的内容を幼少年にも理解しやすいように和文で示した後に、儒教の經典の原文を載せ、さ

らに神道における例題を示し、最後に会津藩に関わりの深い事柄を例題として示している点が挙げられる。

以上が『日新館童子訓』におけるおおまかな概要であるが、この書物に説かれている全体を通じての基調は孝道の概念であり、これが親に対しては誠であり、主君に対しては忠となり、師に対しては敬となり、兄弟では悌になると説かれている。また、先述したとおり、この思想は後の戊辰戦争における白虎隊の隊士に多大な影響を及ぼしたといわれている。

『日新館童子訓』にみられる「死」に関する記述で主要なものを挙げると以下の表3のようになる。

表3 『日新館童子訓』にみられる「死」に関する主な記述

「死」に関する記述 (下線部筆者)	左記の記述から読み取れる事柄
①日新館童子訓 上 いらざる事な申そとて脇ざしを後へなげすて御側へ進みよりむなしくながらへ居て御運のおとろへさせ給ふを見奉らんよりは只今御手に懸り手て責て御恩を報い奉る志のしるしと存じ奉らんと云て頭をのべて平伏しければ候何の辞もなく奥へいられけり	・主君への諫言をした時の場面であり、空しく生きるよりは、主君の恩に報いようという志を優先して死のうとする記述から、死よりも武士としての志を重視する死生観がみてとれる
②日新館童子訓 上 義都一とせ浮腫の病をうけいとかるからざりしかば武石衛門朝夕側をはなれずねんごろにいたはり養ひしかども日にそひてたのみすくなくなり行しかば武石衛門義都の才幹ありて必登庸せられん事をおもひいたるにやひそかに一紙の祝文を作てみづからの命をもて師にかはらんことを神祇に望こふ	・自分の命と引き換えに、師の助命を神に誓う記述から、神道的影響が窺えると同時に、自身の運命と師の運命を神に託するという死生観がみてとれる

<p>③日新館童子訓 上  <u>其上父母の身は我身にして</u>  <u>我身は則父母の身なり</u> <u>我</u>  <u>身ほろびぬとも父母やすく</u>  <u>世にあり給はんは我猶世に</u>  <u>あるがごとし</u> <u>我身世に在</u>  <u>とも父母の飢をだに救ふこ</u>  <u>となくば猶亡たるがごとし</u></p>	<p>・祖先崇拝にも通じる思想が窺い知れる          ・孝行の道による影響が多分にある死生観であるといえる</p>	<p>あり、身を殺しても仁をなすことを重んじる死生観がみてとれる</p>
<p>④日新館童子訓 上          人の世にある物のこゝろつきて僅に五十年平日も死すべき義に当て死せざれば汚名を千歳に残し人につまはじきしてそしられ父母の名まで耻しめ生がひもなきことならずや</p>	<p>・義を重要視し、義にはずれては生きる甲斐もなく、父母ならびに祖先までも恥しめてしまうという考え方から、義を非常に重視する死生観がみてとれる</p>	<p>⑧日新館童子訓 上  <u>松寿千年終にはくつる事ぞ</u>  <u>かし</u> <u>人生は朝露の日影を</u>  <u>まつがごとし</u> <u>たゞ永く世</u>  <u>に残らん者は義名にありと</u>  <u>覚え候程に降参は仕らじと</u>  <u>高声に呼はりければ忠元も</u>  <u>またいふ事なかりけり</u></p> <p>・人生は露のようなもので、永く世に残るのは義に生きた名であるということから、義と名を重んじる死生観がみてとれる</p>
<p>⑤日新館童子訓 上  <u>曾子のいはゆる大勇とて</u>  <u>千万人むらがりつどひてぬ</u>  <u>きつらねたる白刃をも踏お</u>  <u>かし吾に耆人の助なく独行</u>  <u>して万死におもむく事も只</u>  <u>義を見て死をかへりみざる</u>  <u>一にあり</u></p>	<p>・義に殉じることが大勇であり、死を顧みないという義を重視した死生観がみてとれる</p>	
<p>⑥日新館童子訓 上  <u>孝弟をはじめ古の道を厚く</u>  <u>信じ身に踏行ひ死に至ると</u>  <u>いへども道を失はず節義を</u>  <u>守るべし</u> <u>志士は己欲し願</u>  <u>はざる事を人に及さず</u> <u>己</u>  <u>欲する所を以て人に及ぼし</u>  <u>人を愛して我身を愛せず</u>  <u>或は君を諫め或は国家の大事</u>  <u>をはかり仮令其事為おふ</u>  <u>迫るとも死をかへり見ず身</u>  <u>を殺して仁をなさむ事を思</u>  <u>ふべし</u> <u>生をむさぼり求て</u>  <u>なすべき義に当てても身を愛</u>  <u>し家を顧て其事をなさざる</u>  <u>は不忠不孝のいたりなり</u></p>	<p>・たとえ死ぬことになっても道義からは外れてはいけないという戒めであり、身を殺しても仁をなすことを重んじる死生観がみてとれる</p>	
<p>⑦日新館童子訓 上          論語曰孔子曰篤信好学守死善道 又曰志士仁人無求生以害仁有殺身以成仁</p>	<p>・たとえ死ぬことになっても道義からは外れてはいけないという戒めで</p>	

以上の表3の記述をもとに考察すると、『日新館童子訓』における死生観の特徴として孝道という観念と義の観念が根底にあることが理解できる。また、表3の記述(⑥⑦⑧)からも理解できるように仁義や孝弟といった儒教的教示を重んじる中で、表3の記述(②)にみられるように自分の師が重い病にかかったとき、自分の命と引き換えに師の助命を神祇に誓っているに点に神道的影響もみてとれる。また『日新館童子訓』には死に関する記述以外にもこのような神道的影響が多分にみてとれる。

このように、仁・義・孝といった儒教的教示と神を篤く信じるといった神道的教示が孝行の道において一体化(神儒一致)し、かつそれが武士の学ぶべき道であり修養すべき事柄であったという点に『日新館童子訓』における死生観の特徴がある。また時代的には『日新館童子訓』が成稿する少し前に水戸藩で国学・史学・神道を基幹とする水戸学が興隆したことにも少なからず影響されていると考えられる。ここに『日新館童子訓』にみられる死生観の特徴と時代的特殊性がみられる。

## VI. おわりに

本節では、士道論に属するとされる『山鹿語類』、松代版『武道初心集』、『日新館童子

訓』のそれぞれにみられる死生観の特徴を比較し、どのような異同や変遷があるかをみていきたい。各史料の特徴をまとめると表4のようになる。

表4 『山鹿語類』、松代版『武道初心集』、『日新館童子訓』の比較

書名	『山鹿語類』	松代版『武装初心集』	『日新館童子訓』
成立年	1665 (寛文5年)	1725 (享保10年頃)	1804 (文化元年)
著者	山鹿素行	大道寺友山	松平容頌
成稿に関与した人物	門下生	松代藩の儒者	会津藩の儒者・神道学者ら四名
思潮	士道論	士道論	士道論
宗教的性格	兵需一致	儒教	神儒一致
教示的内容	職分の自覚・人倫の道の体現	武士たる者のあり方・死を常に心にあつる	孝道の体得と訓育

以上に示した表4からも理解できるように、各時代において或は地域において武士に大きな影響を与えたとされる武士道書であり、同じ士道論の思潮であるにも拘らず、それぞれの史料にみられる宗教的性格は儒教を基幹としながらも違いがみられる。また、それぞれの史料にみられる著者の狙いや目的にも変化がみられる。

傾向として、武士の修身を目的としたバイブル的書物であった各史料ではあるが、泰平の世が進むにつれて、武士に求められるものの内容が変化し、教示的内容が矮小化されてきていると考えられる。

各史料にみられた死生観の特徴を踏まえ、士道論に限定してではあるが、表4にも示した各々の史料から読み取れる「宗教的性格」や著者の求めた「教示的内容の変化」が時代

的特殊性として考えられる。

## VII. 今後の課題

本研究では、武士道思想における士道論に限定したなかで、さらに代表的な各史料に焦点をあてるに留まったため、それぞれの史料における特徴は取り上げることはできたが、それらをもとに時代的特殊性を明確にするまでには至らなかった。それぞれの時代の研究対象とする史料を増やし、比較・考察をおこなうことは今後の課題としたい。

## VIII. 参考文献

- 酒井利信：『日本精神史としての刀剣観』，第一書房，2005。  
 酒井利信：『刀剣の歴史と思想』，日本武道館，2011。  
 相良 亨：『武士の思想』，ペリかん社，1984。  
 相良 亨：『日本人の心』，ペリかん社，1984。  
 古川哲史：『武士道の思想とその周辺』，福村書店，1957。  
 古川哲史：『改編新版 日本の求道心』，理想社，1992。  
 古川哲史校訂：『武道初心集』，岩波書店，1943。  
 菅野覚明：『よみがえる武士道』，PHP研究所，2003。  
 菅野覚明：『武士道に学ぶ』，日本武道館，2011。  
 高橋昌明：『武士の成立 武士像の創出』，東京大学出版会，2004。  
 多田 顕：『武士道の倫理 山鹿素行の場合』，麗澤大学出版会，2006。  
 磯部忠正：『「無常」の構造 幽の世界』，講談社，1976。  
 橋本 実：『武士道講話』，有光社，1942。  
 鈴木文孝：『近世武士道論』，以文社，1991。  
 中本征利：『武士道の考察』，人文書院，2006。

- 小澤富夫：『歴史としての武士道』，ぺりかん社，2005.
- 橋本 実：『武士道史要』，大日本教科図書株式会社，1943.
- 高橋富雄：『武士道の歴史』（1・2・3），新人物往来社，1986.
- 高橋富雄：『武士の心 日本的心』（上・下），近藤出版社，1991.
- 中林信二：『武道のすすめ』，島津書房，1990.
- 中林信二：『武道論考』，中林信二先生遺作集刊行会，1988.
- 大道寺弘義監修：『武道初心集を知る』，教育評論社，2010.
- 相良 亨：『日本人の死生観』，ぺりかん社，1984.
- 和辻哲郎：『日本精神史研究』，岩波書店，2007.
- 加藤咄堂：『死生観 史的諸相と武士道の立場』，書肆心水，2006.
- 沖田行司：『藩校・私塾の思想と教育』，日本武道館，2011.
- て扱うこととする。
- 4) 田原嗣郎・守本順一郎校注『山鹿素行』岩波書店，p.454，1970.
- 5) 相良亨『武士の思想』ぺりかん社，p.74，1984.
- 6) 相良亨『武士の思想』ぺりかん社，p.74，1984.
- 7) 相良亨『武士の思想』ぺりかん社，p.75，1984.
- 8) 山鹿素行『山鹿語類』國書刊行会，p.352，1911.
- 9) 古川哲史『武士道の思想とその周辺』福村書店，p.195，1957.
- 10) 古川哲史校訂『武道初心集』岩波書店，p.4，1943.
- 11) 古川哲史校訂『武道初心集』岩波書店，1943.
- 12) 相良亨『武士の思想』ぺりかん社，1984

### 【注】

- 1) 相良氏も著書『武士の思想』において同様に指摘している。  
相良亨『武士の思想』ぺりかん社，p.74，1984.
- 2) 相良氏も著書『武士の思想』において同様に指摘している。  
相良亨『武士の思想』ぺりかん社，p.74，1984.
- 3) 武道初心集には大別して二系統に分類され、筆字による写本と木版刷りによる版本とがあり、前者を「五十六條本」後者を「四十四條本」とされている。また、古川氏は「五十六條本」を原本とし「四十四條本」を松代版として指摘しており、本研究では古川氏の指摘を支持するものとする。また、一般的に世に広まった「士道論」を代表する『武道初心集』は松代版であることから、本研究では松代版をテキストとし